

恋人に内緒で勝負下着のPRモデルになったら、嫉妬した彼が丸一日かけてお仕置きしてきたんだけど！？

体験版

受け：メロウ/メロさん

攻め：セノ

要素：年下攻め、焦らし、拘束、玩具、乳首責め、前立腺責め、言葉責め、おねだり、潮吹き、受けフェラ、攻めフェラ、駄弁、連続絶頂、結腸責め、お仕置き

日も暮れて、そろそろ世間は夕食の時間帯の家が多くなるくらいの時間。到底家族団らんの時間とは思えない、けたたましいインターホンの音が聞こえてきたので、僕はため息をつきながら騒音の元凶を家に招いた。

「ちょっとメロさん！？何これ、俺聞いてないんですけど！！」

仕事終わりのセノ君は、僕の家に入るなり、どこどかと僕をリビングまで押しやって、バンとテーブルに雑誌を叩きつけた。彼の手によって広げられたページには、見開きで僕が映っている。

ちなみにこのカラー写真、服よりも肌色の面積が多い。なぜならば、この写真の主演は僕ではなく、僕が身に着けている下着だからだ。

「まあ、これはその…。会社でお世話になってる下着メーカーさんが、どうしてもモデルに僕をって指名されちゃって」

「それでこんなエッチな写真撮らせたんすか！？何！？この際どい下着！ドスケベ過ぎるし！てかエロい顔も何！？見た人全員フル勃起したらどうすんの！？」

「そんな人ばかりが見るわけじゃないよ」

「見ないって言い切れないっすよ！少なくとも俺は抜ける！」

「うん、そうだね。セノ君はそうだろうね」

セノ君から卑猥過ぎると指摘された点に関しては、僕も言い訳できない。というより、相手方も一般のモデルでは難しいと分かって僕を指名しているんだから当然だ。しかもこの下着のコンセプトは「勝負下着」なので、際どくなるのも仕方ない。

そもそも僕もモデルの仕事は本業ではないから、上手くできるかは不安だった。ただしそこはプロのカメラマンの力で、どうにかなってしまうのだからすごい。事前に出来上がりのサンプルを見せてもらったけれど、「もっとしたくなっちゃう？」「たまには刺激的な僕もアリ？」「欲しいって、口で言わないとダメ？」

等など、割と過激なポーズをとった僕の写真と一緒に、AV顔負けの文字が並んでいた。多分、加工すればそのままAVのジャケット写真にもなれそうだ。ただし、これはあくまで仕事で受けたこと。先方のリクエストに応えたかわりに、新作下着を無償提供してもらえる約束だし、会社のお付き合いもある。もちろん、世間にこんな写真が出回るのを、セノ君が恋人として嫌がるのは分かる。ただしそれを言ったら、僕が未だにゲイビに出続けている方が問題な気がする。

「僕が個人的に撮ってもらったなら怒られても仕方ないと思うけど、これは仕事なんだからしょうがないでしょ？それに、僕が男優に入れられるのはOKで、なんで下着の写真はNGなの？」

「そっ、それはだって！ゲイビのは、メロさんの大事な仕事って割り切れるっすけど…。写真はなんか違う！てか、俺だってまだこんなの着てもらったことないのにずるい！」

「僕が嫌がって着ないからね」

「そうっすよ！いつもそう！メロさん俺の選んだやつ着てくれないっすもん！なんで！？なんで俺のは断るのに、仕事では着るんすか！ひどい！メロさんのいけず！」

そして独自の理論を展開するセノ君は、げんなりする僕を見もせず半泣きだ。こうなったセノ君は正論をぶつけても納得してくれないので、彼が諦めるまで適当に誤魔化すしかない。

「メロさんは、もっと自分が魅力的なんだってこと自覚した方がいいっす！俺、さっき見たっすもん！SNSの公式写真にアップされてたの！こんなエッチな写真、秒で拡散されんすからね！メロさんは隠れたエロ上級者なのに、これ以上表に出たら困る！」

「元々僕は君みたいに人気な方じゃないし、拡散されても一時的なもので終わるよ。今回も僕じゃなくて下着が主役なんだし」

「違うもん！俺はエロいメロさんが知れ渡るのが嫌なの！」

「ゲイビに出てるのは調べればわかるし、僕がどんな人かなんて隠しようもないことでしょ？」

「も〜！ああ言えばこう言って！もういいっす！メロさんがそんなんだったら、俺も考えあるっすからね！男の嫉妬は醜いってことが分かるまで教えるんで！」

「普通そういう台詞は、自分で言わないんだよ」

「いいっすもん！俺、メロさんが反省するまで許さないもん！」

「はいはい、ごめんごめん」

ただし怒っていても僕への愛情が突き抜けている彼は、こういう時の怒り方も変わっている。通常の喧嘩なら、陰悪なムードになってお互い顔を見せないようにするとか、無視をするとかになるんだろうけれど、彼はソファに座る僕に向かって飛び込み、ぐりぐりとお腹に額を擦りつけてくる。もっと撫でないと許さないと主張するペットみたいでかわいいのだけれど、大きな身体は重くてちょっと大変だ。

「もう晩御飯食べた？」

「まだ食べてないっす」

「出前とる？僕、近くに出来たタコス屋さん気になってるんだけど」

「めっちゃ腹減ってるから3つくらい頼んでほしい」

「ポテトは？ミートソースとチーズがかかってて、セノ君好きそうかも」

「それも食べたいっす」

「美味しそうだからこのサルサソースも頼んでいい？辛いのが嫌なら他のにするけど」

「他のは何があるんすか？」

「他のは、サワークリームとか...」

とはいっても、彼のご機嫌取りにも慣れたものだ。不機嫌なセノ君をとことん甘やかして、腹を満たしてあげて、ついでに夜のお世話も少しすれば、セノ君の怒りは大抵すぐに鎮火する。これは彼と付き合ってから実践で学んだ、セノ君のあやし方だ。

正直僕からすると、セノ君が自分の気に入らないことで文句を言うのはよくあることで、一個一個気にしていたらきりが無い。だから今回も、いつもの我儘なのだと思って適当にあしらってしまった。

でも、この選択こそがミスだった。そう、僕はとても甘く見ていたんだ。セノ君の言う、男の嫉妬というやつを。だから実は根深いところに彼の怒りが潜んでいたことを、僕はすっかり見落としていた。



そして、下着写真事件のほとぼりも冷めてきたころ。お互いの撮影スケジュールの日程もあり、僕らは少しの間すれ違いの生活になった。いつもならそれぞれの家で過ごすところだけれど、セノ君から短い時間でもいいから一緒にいたいとおねだりされたので、僕はしばらくの間、セノ君の家で半同棲生活を送っている。ただ、実際に僕らが顔を合わせて会話をするのは限られた時間で、夜の寝る前か、あるいは朝の仕事前くらいで、日によってはほぼ顔を合わせない日もある。でも売れっ子のセノ君は普段から忙しくしているし、僕の忙しさが偶々重なってしまっただけで、彼が家にいないのはよくあることだった。

だからこの日も、僕は一足先にベッドに入って眠りにつこうかと思っていた時に、玄関が開く音がした。迎えに行っても良かったけれど、あまり遅い時間まで起きていると、逆にセノ君は僕が気を遣っているのではと気にしてしまう。だからあえて寝たふりをして、彼を心配させないように毛布の中で大人しくしていた。

ほどなくして、寝る前の支度を整えたセノ君が寝室にやってきた。もぞもぞと布団に入る彼の気配を、僕はうつらうつらとしながら感じる。

「メロさん...」

僕の温もりを求めて、セノ君は背後から僕のお腹に手をまわした。優しく抱きしめてくれる彼の腕の感触が心地いい。すん、と首筋の香りを吸われて、少しびくりと肩が動いたのは恥ずかしかったけれど、完全に覚醒するほどではない。だから僕も、このまま静かに眠りにつこうと思った。

けれど、彼の手がゆっくりとTシャツの中に入ってきたところで、良くない雰囲気を感じ取る。

最初は、ちょっとした悪戯だと放っておいた。だけれどその手がお腹から胸に、そして乳首に伸びてきたあたりで、寝ぼけていた頭にもじわりと快感が送られ始める。

「...っ！う、ん...」

あくまで僕は寝ている体だから、彼の愛撫で感じている素振りを見せてはいけない。というより、僕自身も明日の午前中から打ち合わせがあるし、今からするのは遠慮したい。それに、明日は僕よりもセノ君の方が早く家を出なければいけないはずだ。だったら尚のこと、こんな些細な触れ合いで感じていてはいけない。そう思っても、久しぶりに彼の指先に触れられる乳首は、既にツンと尖り始めた。いやいや、身体が先に期待してどうする。違う、これは生理現象。触られたら嫌でもこうになってしまうんだと、誰にするわけでもない言い訳で自分を誤魔化していく。

「ふっ、っ、う...！...っ、あ」

でもどれだけ我慢しても、感じるものは感じる。何と言っても、相手はプロ。感じやすい僕を高めることなんてお手の物だ。

すりすり、くにくにと優しく両胸をこねられると、じわりと背中に汗が滲む。ドキドキと鼓動が早くなるし、ゆるく勃起しているのもバレていそう。それでも、僕は寝ている設定だから。これが狸寝入りだとバレたらもっと大変なことになるからと、必死に声を押さえる。

それなのにセノ君ときたら、今度は布越しに僕の熱を握ってきた。明らかに勃起上がっているのを分かっていて、あえて触れてきている。直接触れてこないのは、ギリギリ寝ている僕を気遣ってのことなんだろうけれど、それが逆にもどかしい。

「かわいい…。かわいいな、メロさん…」

「ッ、っ…！」

そしてこれだけちょっかいを出してくるのだから、セノ君だってその気になっている。お尻のところに、後ろからぐりぐりと彼の熱が押し付けられている。布越しとはいえ、固い感触を覚えてしまえば、ひくりと下着の中の孔が疼いた。欲しがる自分を感じて、耳が熱くなる。

言われてみれば、もう何日もしていない。一か月はいかなくても、そのくらい空いている。セノ君と付き合ってから、こんなに間が空いたことは初めてだ。だってセノ君ときたら、所かまわず手を出しては、止めてと言っても抱いてくるから。僕だって火を付けられたら、やらないと満足できなくなってしまったじゃないか。

ごくりと、ひそかに唾を飲む。じわっと先走りも滲むし、お尻も限界だ。期待感で身体がはちきれそうになっている。これじゃあ寝れない。僕の方が我慢できない。

だから、僕は寝たふりの継続を止めて、セノ君に声をかけようとした。明日早いとしても、軽く一回くらいならと。そう思って口を開きかけた時、なぜか彼の愛撫がピタっとおさまった。それからまた抱きしめられて、背中のシャツにセノ君の額が擦られる。

「おやすみ…」

そして聞き捨てならない挨拶が聞こえたかと思うと、大人しくなったセノ君は、すぐに寝息を立て始めた。完全に動きを止めた彼に対して、慌てているのはむしろ僕の方だ。

嘘だ。セノ君に限って、この展開まで持ってきて寝ることがあるのか。自分からちょっかいをかけておきながら、しかも勃起していたのに抜かずに寝るなんて。ありえない。前代未聞だ。

わなわなと、唇と身体が震えた。おあずけをされて、実は僕も苦しい。でも冷静な僕は、そんな自分をたしなめている。

落ち着け、落ち着くんだ。遅くまで仕事だったセノ君は疲れている。いくら若かろうと、連日大忙しなのだから、セックスする元気が不足しているんだ。例え勃つものは勃っても、睡眠を優先する場合だってあるじゃないか。セノ君に限ってそんな日はあるのかと疑問には思うけれど、現に彼は寝ている。それが証拠だ。

大体、するにしてもわざわざ明日の仕事が早くから始まると分かっている、あえてすることもない。セノ君だって大人だ。だから、自分たちのスケジュールを考えて自制してくれたのかもしれない。なのに僕の方が誘うなんて言語道断だ。確かにおあずけは辛いけれど、この熱をどう消化したらいいのか分からないけれど、とにかく寝よう。寝たら忘れられる。

そうやって一方的に僕を昂らせたセノ君が、悶々としてなかなか眠れない僕を見てひそかに笑っていたなんて、自分の事に必死すぎた僕は気が付かなかった。

そうして苦悶の夜を超えた僕は、寝不足の目を擦ってキッチンに立った。実は朝のベッドで、1分くらいセノ君を無言で眺めて、最後の最後まで寝起きを襲おうと思っていたことは死んでも内緒にした方がいい。

全く冷静になれない自分を落ち着かせるために、僕は顔を洗ってから、すぐに朝食作りに取りかかった。邪念が生まれるのは、いやらしいことを考える余地があるからだ。他の事をしていればいずれおさまるはず。そう思ってパンを少し厚めにスライスしながら、フライパンや鍋、食材を準備していった。

でも僕の計画は、くしくも崩れてしまう。背後からのしりとかかった重みで、思わず調理台に手をついた。

「おはよ、メロさん」

「おはようセノく、んっ!？」

今日は早い時間から打ち合わせ予定のセノ君は、いつになく早起きだった。でも、僕が声をかける前に起きてきたのは特に問題じゃない。良くないのは、僕にただおはようとだけ言えればいいのに、余計なちょっかいを出してくることだ。ちゅ、と首筋にひとつキスを落とした彼は、それがさも当然と言わんばかりに太ももを撫でてくる。すす、と上方向に撫でられて、かなり際どい所まで上がってくる手のひらに、押さえつけていた昨晚からの欲求がぶり返してくる。ぶわっと全身の性感が高まる感覚に、思わず膝が震えた。

「く、ッ、っ...！？ちょ、っと！危ないから！」

「ん〜？」

「ん、じゃ、なくてっ」

「朝からエッチになっちゃう？」

「あ、あっ...！」

すり、すり、と太ももを撫でるだけにとどまらない手は、するりとシャツの中にも入ってきた。脇腹の薄い皮膚や乳首の周りをまさぐられると、ゾクゾクと背筋がわななく。ぐっと息が詰まって、諭すように耳を甘噛みされると、だんだん足に力が入らなくなってきた。

「ふあ、あ、あ、う、ううっ...！」

「足ガクガクしてるっすよ？朝からやらしい」

「ひっ、ッ、あ、だ、って...！」

僕がいつもと様子が違うことに、セノ君も気づいたらしい。でも僕をおかしくしたのは彼だ。君が昨晚、中途半端に手を出さなければ。僕だってここまで感じたりはしていない。でも寝ていたはずの僕が、それを指摘するのはおかしい。だから何も言えずに、調理台の上で拳を握った。

「ここも相変わらずスベスベ。いつ触っても気持ちいい」

「ひゃ、あ、あ...っ！」

全身を撫でる手は、とうとう僕の下着の中にも滑り込んできた。さわさわと臀部を撫でられると、快感と期待で言葉が出ない。うっかりつま先立ちになって、セノ君の方に腰を押し付けてしまう。

がくりと、身体が前のめりになる。もうだめだ、我慢できないと、下唇を噛んだ。

きっと僕は、こうして朝からハメられてしまうんだ。すぐに下着ごとズボンを下ろされて、昂ったセノ君のモノを入れられて、出かけるまでエッチしようってベッドに連行されて、それで――。

「じゃ、俺今日早いから先に着替えてくるっすね！」

「っ、え...？」

でも僕が脳内をセノ君とのこれからで埋め尽くしたところで、彼の手はパッと離れていった。最初は何が起きたのか理解できなくて、ぼんやりセノ君を見上げてしまう。

「...？し、ない、の...？」

「するって何を？飯食うんでしょ？」

「え...？いや、うん。ご飯、だよね」

「俺、目玉焼きは2個で！焼き加減はメロさんと同じにして。ベーコンかハムあったら、一緒に焼いてくれるとめっちゃ嬉しい」

「う、うん...」

うっかり自分から期待していたことを白状してしまったけれど、それすら気づかなかった。むしろ仕事に向けて真面目な彼の発言で我に返る。洗面所に消えていくセノ君の背中を見送ったら、へなへなと力が抜けて、キッチンの床に膝をついていた。

まさかのおあずけだ。昨夜に続いて、朝もなんて。信じられない。セノ君なのに。セノ君に限って。あそこまでお膳立てして、僕を抱かないなんてそんなわけが。

いや、何を嘆いているんだ。彼も僕もこれから仕事なんだから、分別をもって僕を襲わなかったのは良いことなのに。むしろ大人な対応が取れたセノ君を褒めるべきだ。なのに、僕ときたら。ダメだダメだ、頭がエロいことで汚染されている。これはもう料理で忘れるしかない、僕は彼からリクエストを受けたとおりに朝食を作った。

目玉焼きとパン、あとは冷蔵庫にあったベーコンを焼いて、昨日の残りのスープを温め直してテーブルに並べていく。そしてちょうど準備が出来たころ、着替え終わったセノ君がダイニングにやってきた。でも、彼は並んだメニューに喜びな

がら、ニコニコ顔で朝食をほおぼって何事かを話していたけれど、僕はどこか上の空だった。

「は～、お腹いっぱい。打ち合わせ寝ちゃいそう。ってうわ、もうこんな時間！？ヤバいやばい、今日打ち合わせ場所変更になったんだった！」

「え？大丈夫？間に合う？」

「時間的にはまだ余裕なんすけど、朝だと道が混んでるから時間読めないんすよね～」

バタバタと準備するセノ君は、食器を片してすぐに歯を磨き、仕事用のジャケットを羽織った。あわただしいけれど、彼と顔を見ながら会話できる時間はギリギリまで僕も一緒にいたいから、玄関まで見送っていく。

「じゃあ行ってきます！」

「うん、行ってらっしゃい」

「...お見送りのチューはないんすか？」

「時間がないって言ってなかった？」

「ちょっと！ちょっとだけ！」

「はいはい」

そして甘えたな彼は、大体いつも朝のスキンシップを求めてくる。昔はかなり気恥ずかしかったけれど、これを乗り越えないと彼との共同生活は営めないのも、

最近は慣れたものだ。だから今日もいつもと同じように、軽く唇を付けて終わるものだと思ったら、不意にきつく抱きしめられた。

「んっ！？ちょ、セノく、ん、むっ！！？？」

さっとキスしてパパッと出かけると思っていたのに、驚いて口を開いたら、なんと舌まで入ってきたのでさらにびっくりした。ぬるんと絡みつく舌や、しれっと僕の腰を撫でる手に、再び火を付けられてしまう。まずい、この触り方は良くないと首を振ったら、ぐりっと膝で股間を刺激された。ぐに、ぐに、と緩く勃起した場所を押されると、ぼうっとして頬が熱くなる。

「はふっ、ッ、ん、んふっ、ふっ、っく...！」

どうしよう、こんな触り方をされたら感じてしまう。さっき変におあずけされたから、余計に期待するじゃないか。いや、もしかしたらセノ君は、ここで僕を抱くつもりなのかもしれない。そうだ、時間がギリギリと言いながらもいきなり押し倒して、やっぱり我慢できないとか言って、玄関で無理矢理僕を襲って――。

「はい、充電完了！それじゃ、メロさんもお仕事頑張っね！」

「ふえ...？」

「行ってきます！」

でもまたしても、僕の脳内が完全にエッチな妄想で埋まったところでセノ君は離れていった。スッキリとした笑顔で手を振り、扉を開けて出ていく彼を見て、僕は呆然とした。そのままずるずると、床にへたれこむ。

嘘だ、嘘だと言ってくれ。昨日から合計して、僕は3回もおあずけされたというのか。というかあのセノ君が、僕をこれほど高めて襲わずに終わるなんて。意味が分からなくて、僕は思わず半泣きだった。

「なんで...？なんで、抱かないの...！？」

一昔前の僕だったら、ゲイビ出演時以外では絶対に言わなかった台詞だ。こんな言葉が独り言で出てくるくらいには、僕はセノ君に染め上げられている。心も身体も、彼を求めている。

だけれど、肝心の彼は本日も熱心にお仕事だ。それを咎められるような性格じゃないし、僕も邪魔者にはなりたくない。だから昂る身体を一人抱きしめて、どうにか仕事に行く前までには心を整えた。

10時の打ち合わせには時間があったから、何とか悶々とする気持ちを落ち着かせて家を出たけれど、完璧に調子は戻せなかった。普通を装って席にはついたものの、打ち合わせの内容が耳に入っていない。新作のコンセプトやら相手の男優やら、ターゲット層を話しているのに、どうもぼうっとしてしまう。

「なんか顔赤いですね、メロウさん」

「えっ、そ、そうですか！？」

「風邪ですかね～？流行ってるらしいんで。会社の常備薬飲んどきます？」

「いいいい、いえいえ、全然、多分来るとき暑かったから、そっちかも」

「熱中症も怖いですよ～。残暑も厳しいし」

しかも僕が集中出来ていないことを指摘されて、更に恥ずかしかった。はた目から見ても、顔が赤いとは。適当な理由を言ってみたけれど、まさか見て分かるほど欲求不満な顔をしているなんて。今までにない失態に、自分でも解決法を見いだせない。

遠回りをせずこのモヤモヤを発散するためには、セノ君と肌を合わせるのが最も適切だと思う。とはいえ、工作中的の彼を呼びつけるのはあまりにもだらしがない。なので今日の夜、たまには僕から彼を誘ってみることにした。頭の中まで性欲で満たされているセノ君ならば、僕から誘えばほぼ100%乗ってくれるだろう。

けれど、僕がセノ君を求めている時に限って、彼の帰りが遅くなるという連絡が来てしまった。なんということだ、こんな日に限ってと、飲み会の主催者を恨む。でも、仕事のお付き合いを責めるわけにもいかず、僕は枕をベッドに叩きつけることで不満を消化した。

「こっちはムラついてどうにかなりそうなのに～！セノ君が昨日の夜からちょっかいかけてこなければ、こんな事には...！」

寝具にあたったところで身体の熱はおさまらないけれど、怒りは少々おさまる。そうだ、怒ったって仕方ない。というか、結局は身体が疼いているのが問題なんだ。だったらセノ君を待つより一人で抜く方が早いのではないかと、枕に顔を埋めながら考える。

ただし、抜くとしても問題がある。僕の身体を僕より熟知している彼は、一人で抜いたら必ず見抜く特技を持っていた。しかもバレたら怒られる。なんで俺に言ってくれなかったんすか、と拗ねる。でもそれを考慮しても、もうセノ君を待てないほど身体が疼いている。

色々考えた結果、前でイカなければバレないのでは、という結論に落ち着いた。後ろを弄るだけにとどめれば、君の為に準備しておいたと言える。よし、ならば彼が飲み会から帰ってくる前にすませてしまおうと、そそくさとバスタオルとローションを準備した。

「大丈夫、ちょっと弄るだけ。一回するくらいならバレないバレない...」

布団をはいだベッドの上にバスタオルを引いて、下着を脱いだ状態で四つん這いになる。それからローションで濡らした指を孔に当てて、ゆっくりと中に埋めていった。

二つある枕のうち、セノ君のものを自分の顔の近くに寄せる。片手で抱えて、彼を思い出しながら指を動かすと、疑似的にセノ君に抱かれている気分にひたれる。

「ん、んん...っ！セノ君、セノ君...」

ただ、気分的にそれっぽくはなっても、指は僕の物だし、彼の体温もないし、声も聞こえない。でも自慰の時に難しいことを考えても仕方ないので、足りない部分は想像でカバーだ。

セノ君は上手だから、拗ねていたら痛みではなく、快感で僕を落としにくることが多い。こうやって中を弄る時も、ひたすらにいい場所を擦って、嫌と言ってもやめてくれずに、僕が達するまで追い込んでくる。

「ふぁ、あ、ッ、そこ、そこだめ、も、やだぁ...！」

僕が身をよじったら、のしりと上から覆いかぶさった彼が動きを封じてくる。それから耳の傍に口を寄せて、イクまでやめないっすよ、と言うんだ。だけど、一度イッたってやめてくれない。僕が泣いて謝っても許してくれない。ゾクゾクと昂って、絶頂から下りてこれない僕を更にいじめるのは、彼がよくやる意地悪の一つ。

「んう、あ、は、はう、っ、イッ、ちゃう、イク、も、イクからぁ...っ！」

妄想のセノ君に責められるうちに、気持ちも身体も高まってきた。少々の物足りなさはあるけれど、おあずけが長かったから、今はこれでも気持ちいい。激しめに指を動かせば、あと一步でイける、という段階に来た。だから僕もようやく熱が発散できると、手元の枕に顔をつけて思い切り息を吸い込む。

けれど、こんな時にタイミング悪く電話が鳴った。なんで今だ。嫌だな、仕事の電話以外だったら無視して後でかけなおそうかなと、ベッドの上に置いたスマホを見る。

するとなんと、電話の相手はセノ君だった。この場合仕事相手ではないけれど、誰よりも優先すべき人なので、僕は自慰を止めて大慌てで電話に出る。

「もっ、もしもし？どうしたの？なにかあった？」

「あ、メロさん？ごめ～ん！ちょっとお願いあって！今日の朝、急いで出たから忘れ物しちゃって、しかも鍵も中みたいなんすよね～。もうすぐ家に着くんで、ごめんけど開けてもらってもいいっすか？」

「あっ、そっ、そうなんだ！？分かった！すぐ開けるね！」

ただし電話に出たら出たで、とんでもないアクシデントが待っていた。まずい。まさかセノ君がやってきてしまうとは。今日は帰りが遅いと言っていたから、彼がこの時間に帰ってくるのは完全に想定外だ。まだ事前に連絡があったのはいいものの、忘れ物が何か分からないので、僕の不純行為の証拠は全て隠滅しないと具合が悪い。

ひとまず敷いておいたバスタオルで、適当に手とお尻を拭く。それからローションボトルを既定の位置に戻し、ダッシュでバスタオルを巻いて、シーツと布団を手でならした。ベッドの見た目がそれらしくなったので、駆け足でバスタオルを洗濯機に投入する。

「よ、よしよしよし...！これでどうにか...！」

心臓が短距離走の後よりも早く脈打っている。というか変な汗もかいている。若干不審に思われるかもしれないけれど、自慰バレはセノ君がとても厄介になってしまうので、絶対に阻止したほうがいいことの一つだ。とにかくこれで少しの間会う分にはバレないはずだと、僕は急いで玄関の鍵を開ける。

けれど、なぜか玄関を開けると、外側からの力で扉が開いた。びっくりして外を見れば、なんと玄関先にセノ君が立っている。本来彼の家は、鍵がなければ一階のエレベーターホールにも入れないはずなのに。なぜだろう、偶然他の人とすれ違って入れたのだろうか、僕は首をかしげる。けれど、モタモタしているより早く家に入れるべきかと、疑問を流して彼を招き入れた。

「ま、待たせちゃった？ごめんね、開けるの遅くなって。で、忘れ物って何——！？」

電話口では大分慌てていたようだったから、きっと急いでいるのだろうと思っていた。その割にはやけに落ち着いた雰囲気なのが不思議だったけれど、彼は玄関に足を踏み入れるやいなや、僕を壁に押し付けてキスをしてきたのでこっちが冷静でいられなくなる。

「ッ！！？ん、んっ、ゃ、セノく、ん、っ！？」

しかも、キスが長い。やたら激しいし、逃がしてくれない。わざと足の間に膝を入れられると、身長差もあるから股間が押されてしまう。まずい、さっきまでオ

なってたから感じやすくなっているのにと彼を押し返しても、なかなか解放してもらえない。

「んあ、う、っ、ん、んふ、っう、ん、ん...！」

流されるままに感じてしまう。どうしよう、さすがにもうここまで責められたら、言い訳できないほどいやらしい気持ちになる。口を離された時も、僕を見たセノ君は勝ち誇ったように笑っていた。それが悔しくて、僕はつつい彼を責めるようなことを言うてしまう。

「なっ、なに、いきなり！？忘れ物取りに来たんじゃないの！？」

「確かに忘れ物は回収しに来たんすけど。その前にメロさんに聞きたいことがあるっす」

「聞きたいこと...？」

「昨日の夜、俺がメロさんに手を出した時。メロさん、がっつり起きてたっすよね？」

「えっ！？」

ただし僕の攻撃よりも、よっぽど恐ろしい言葉がセノ君の口から飛んできた。なんということだ。まさかセノ君は、昨晚の僕の狸寝入りに気づいていたというのか。じゃあ僕が感じまくってやりたくなっていたことも、彼には筒抜けだったというのか。

いや、だが待て。これは罠かもしれない。僕が鎌をかけられている可能性もある。そうだ、しらばっくれよう。何も知らなかったフリをして隠し通せば勝機はあると、僕は知らぬ存ぜぬの対応をとることにした。

「き、昨日の夜？なんのことか分からないけど？」

「じゃあなんで、朝も今もエッチな顔してんすか？顔に『やりまくりたい』って書いてあるっすけど」

「そっ、そんっ、そんなことはっ」

「どうせ今も、ここ痛いちゃってるんでしょ？」

「ひゃうっ！！？」

けれども僕がセノ君の勢いにのまれまいと工夫しても、彼の猛攻は止まることを知らない。だからしれっと家用のスウェットの中に手が入って、平然と臀部を撫でられて焦った。ヤバい、直接お尻を触られたのはとても良くない。なぜなら雑に拭いたローションの名残が大分残っているからだ。どうしよう、見た目では分からないと高をくくっていたせいで、孔の周りは特にヌルついたままなのに。

「あれ〜？なんか変っすねえ？メロさんのお尻、やけにヌルついてるんすけど。ねえ、今日撮影はなかったのに、ここヌルヌルしてんのなんで？」

「っあ、や、違っ、違う、違うから...っ！」

「違うって何？じゃあこのエロい孔、どうやって説明すんの？」

「うああああ...っ！」

ぬぶ、と指を入れられると、もう言い訳できなかった。これで中までしっかり潤っているのがバレてしまった。しかも前立腺をコリコリと揉まれると、さっきまでイク直前まで昂っていた身体には残酷なくらい気持ちよくて、言葉が出ない。

「はあ、あ、あ、そこ、そこ...っ！」

「腰動いちゃってる。欲しがりすぎっすよ、メロさん」

「っ、あ...！？」

でもいつもなら僕を追い込む指はあっさり抜けてしまった。その切なさ、色々と隠し事が明るみに出たショックで、ぐしゃりと尻もちをつく。そうして何も言えずにうつむく僕の顎をすくったセノ君は、にたあと恐ろしい笑い方をして僕を見ていたので、ビクッと大きく肩が震えた。

「こ～んな美味しそうなメロさん、家に一人置いて飲みに行くわけじゃないっすか。アンタを食いに戻ってきたんすよ。でも、嫉妬した男はしつこいで！そこは覚悟しておいてね」

「や、あ、なっ、飲み会って、言って」

「だから全部嘘だって。ところで、隠し事がへたくそなメロさんは、さっきまで一人で何してたんすか？それ教えてもらうところからでいいっすかね？」

「っ...！」

色々と計画的に行われた犯行に、僕の肝が冷える。でも僕がオナっていたところまでは、彼の計画には入っていなさそう。それなのに、餌を増やすようなことをして。何をやっているんだと思ったけれど、手を引かれて脱衣所に連行された時、僕はもう逃げられないのだと悟った。

ああ、これは非常に危険な予感だ。きっと最大級の罰が、僕を待ち受けている。

洗濯機にもっと他の洗濯物が入っていたらよかったのに、唯一の洗い物がバスタオルだけだったので、そこで僕の負けが確定した。俺に黙って一人でしていたのかと拗ねてしまったセノ君から、脱衣所で散々お尻を弄られて、我慢が限界なのにイかせてもらえず、とうとう僕の心が折れる。

「や、ごめっ、どうしても、我慢できなくてっ...！」

「やだ、俺に言わないでエッチなことしたの許せない」

「うう、あ、やっ、あ、も、それ、それえ...ッ！あ、あ、イキたい、イかせて、もう許してえ...！」

「...許してほしい？もうイキたい？だったら俺の言うこと聞ける？」

「はう、う、聞ける、聞くッ、だからもうっ」

「じゃあお願いなんすけど、これ着て写真と同じポーズしてもらっていいっすか？」

いつもなら、軽々しく彼のお願いを聞くなんて言わない。言ったら何が待ち受けているか分かったもんじゃないからだ。でも今日は気持ちが快感に負けていて、イケるならなんでもできると思ってしまった。けれど、セノ君が僕に見せてきた下着を見て、ひゅっと昂った心が冷えていく。

彼が僕に着てほしいとリクエストしたのは、黒のレザーで出来たTバックの下着だ。Tバックと言っても男性用なので、前側は比較的面積が広めに作ってある。でも前部分にはチャックがついているから、見た目はかなり刺激的だ。

ちなみにこれは、僕が雑誌の勝負下着特集の撮影時に着用した物の一つ。そして記憶が確かなら、ポーズも相当気合が入っていたはず。

「あ、忘れてるかもなんで確認っすけど、ポーズはこれなんで」

僕が下着を握って茫然としていると、セノ君は自分のスマホを操作して、ある一枚の画像を見せてきた。自分が手に持った下着と全く同じものを着て、一人がけのレザーのソファに座る僕の写真を。ただし、単に椅子に座っているわけじゃない。両ひざをひじ掛けに縛られた僕は、あられもないくらい大開脚して、まざまざと局部を晒している。

たらりと、こめかみから顎にかけて冷や汗が流れた。この格好は、色々撮った中でも相当過激なポーズだったのに。なんであえてこれを指定してくるんだと、僕の口はなんの言葉も出さないまま、2度ほど開閉した。

それに、同じポーズをとるとしてもだ。セノ君がわざわざ僕にこの下着を着せて、写真と同じ格好で縛ったうえで、何もしないとは思えない。これはどうにか

別のポーズにするように誘導すべきかと、ようやく僕の喉から声が絞り出てる。

「しっ、下着は、一緒だけど。こんなソファは、この家には」

「まあそれはそうっすね。じゃあ見た目は違うっすけど、ダイニングの椅子にしようかな」

「でも、縛るのは別に」

「メロさん。俺、同じポーズってお願いしてんすけど？足は縛っておかないと、同じになんないっすよね？」

でも聞いたら聞いたで、墓穴を掘るかたちになって終わった。どうやら今のセノ君には、何を言っても無駄らしい。頑なな姿勢を見る限り、僕が言われた通りにしないと納得いかない感じだ。諦めろ、いっそそれでセノ君の機嫌が直るなら安いものだと、僕は悲しみにくれながら下着を履き替えた。

それでも勇気の出ない僕を待ち構えていたセノ君が、半泣きの僕を抱きかかえてダイニングの椅子に座らせて、ささっと足をひじ掛けに縛ってしまう。

「うん。めっちゃエロい。似合ってるっすよ」

「うう…」

片足ずつひじ掛けに縛られているから、どうあがいても足を閉じられない。開脚を余儀なくされた僕をじっくり眺める視線が痛くて、ついうつむきになる。思えばあの時は撮影とはいえ、よくこんな格好をできたなと思う。でも撮影の日は仕

事モードだったし、大勢のスタッフに見られても羞恥心はなかったから、やっぱりセノ君とするのはまた別だ。

元々セノ君からは、こういうアブノーマルな下着を着たプレイをお願いされていたけれど、僕は首を縦に振らなかった。着るだけで終わりそうにないので、意図的に避けてきたのは事実だ。でも今日は自分の方が我慢できないから、待てを継続されるくらいならいじめられたっていいと思っている。

「写真も相当エロかったけど、実際に見るとすごいですね。やらしい、興奮する」

「んんっ！」

さらけ出した下着の上から、するんと淡く撫でられるだけでも、くすぶった火が一気に燃え上がる気がした。だから不自由な腰をどうにか前に出して、彼の手に近づくように動く。

「あ、セノ君、もっと、もっとしてっ」

「ん〜？」

「っく、ううん...！はあ、はあっ、っ、んん！」

でもセノ君の手は、あくまで僕をソフトに撫でるだけだった。レザーの光沢をなぞるようにそっと指先で下着を撫でては、中心の膨らみを時々優しく揉んで、汗ばむ太ももを手のひらでふわりとさする。その度にぞわっと身体を震わせる僕

が、どれほど欲しがっているのか知っているくせに。どうして意地悪するんだと、悔しさと苦しさで下唇を噛む。

「ふう、ううう...！っ、い、イカせて、くれるって、言ったのにい...！」

「イカせてあげるっすよ？でも、もっと俺にも堪能させてよ。せっかくの勝負下着なんすから。いつものメロさんもかわいいけど、エッチな格好のメロさんも楽しみたい」

「うあ、あああゝ あ...ッ！」

だけれど僕がねだったところで揺るがない彼は、Tバックで防御の薄い後ろに指を滑らせる。つつ、とお尻の谷間をなぞられて、ガクンと後ろに背が反った。そっちはさっきまでセノ君に弄られていたから、感度が上がっている。切なさがひとしおで、僕はボロボロと涙を零して腰を振っていた。

「はう、あ、あ、も、待てない、待てないよお...！んんっ、あ、焦らさないで、早くっ、早く」

「欲しくてクパクパしてる。やあらしいの」

「～～っ！！ッ！！んんんンゝッ！！」

カリカリと孔のところを引っかかれると、流石にじれったさも限界だった。ガクガクと縛られた膝が揺れる。もう無理です、早くイかないとおかしくなりますと、全身が彼に屈服したがついていた。

セノ君と比べたら僕なんて足元にも及ばないけれど、当然性欲はある。理性が崩れるくらい、エッチなことがしたい時もある。今がまさにその時な僕は、どうにも我慢できなくて、とうとう彼の方に手を伸ばした。そのまま肩を引き寄せて、首元にかじりつきながらセノ君に縋っていた。

「んっ、ふ、っ、ふうう...っ！お願い、早くっ...！早く入れて、イカせてええ...ッ！」

「も〜。必死過ぎっすよ、メロさん。エッチなことしたら、俺がなんでも言うこと聞くて思ってるでしょ」

「だって...！この下着着たら、イカせてくれるって言った！」

「鑑賞会がまだ終わってないんで無理っすね」

「もう十分見たでしょ！？いつまで待ったらいいの！？」

「はあ...。我儘ばっか言うんすね、今日は。そうやって言うこと聞けないなら、次は手も縛っちゃうっすよ？いいんすか？」

「そ、それはやだけど、でもっ」

「でも、何？俺には縛られたいの？」

「やだ、縛るのはやだっ！」

「まあそうっすよね。じゃあ、はい。これとこれ持って」

けれど全力のおねだりがあっけなく終わって、僕は地団駄を踏んだ。そもそも自由が効かない今、できることは少ない中で、一番良い方法を選んだのに。どうしていつもならノリノリで僕を襲うはずのセノ君が、今日はここまで頑固なんだと、だんだんイライラしてくる。

でも、セノ君から腕も縛ると脅されたら黙るしかない。今の僕が強気に出れる理由は、手が自由なら最悪自分で足もほどけると思っているからだ。その選択が奪われるのはかなり困る。だから一步引いたら、彼から2つのものを渡された。セノ君から手渡されたのは、電マとロープだった。まだ電マは、自分で使えと言われるなら渡された意味が分かる。一方で、ロープに関しては良く分からない。どういう意図なのか図りかねてきょとんとしていると、セノ君が説明してくれた。

「それ、ちゃんと持っててね。落としたら速攻でメロさんに使うんで」

「なっ！？も、持つのはいいけど、これ持ったら手が使えなくなるんだけど」

「え？何か文句あるんすか？嫌なら今すぐ縛るし電マも使うっすけど？」

「っ！！」

ただし、彼が卑猥な道具を何の意味もなく持たせてくるわけがなかった。説明を受けて、僕は自分が物理的に縛られなくとも、この約束に両手の自由を奪われてしまったことに気づく。なんてことだ、してやられたと、彼に文句をぶつけてしまふ。でも不満を口に出したら、作った笑顔でにっこりと笑うセノ君から脅されたので、それ以上の反論は出来なかった。

「持つよ...！落とさず持ってればいいんでしょ！」

「なんかちょっと言い方が気に入らないかも」

「～～っ...！持たせてください！」

「そこまで言うならどうぞ？」

ああいえばこう言うセノ君のせいで、まるで僕が自分で持ちたがっているようになってしまったが、全然そんなことはない。なんなら今すぐ足の縄をほどいてセノ君にまたがってしまいたいけれど、こうなった以上は電マとロープを持つしかない。

そして僕が言うことを聞いたからといって、さっさとイカせてくれるほどセノ君は甘くない。片手に一つずつ玩具を握った僕は、より落としにくいようにひじ掛けの空いているところに手を置いて、防御力を高めたつもりでいた。なのに彼ときたら、それで空いた胸に顔を寄せてくるから、はっとして身をよじったけれど遅かった。

「ひゃんっ！？あ、あう、ッ、んんん...！」

ぬちゅりと乳首に吸い付かれると、ビクンと大きく身体が跳ねる。反対の乳首も親指で優しくこねられて、ついついだらしめない声が漏れた。与えられる刺激に従順な身体が、一気に開いていく感覚がする。

「ふあ、あ、あ、あああ...！」

「ん、ふふ、エロいね、メロさん。乳首だけでもこんな感じて」

「ひう、ッ、気持ち、いい、も、もっとして、舐めてっ」

「どう舐めてほしいの？」

「吸う、やつ...！吸いながら舐めっ、あ、え、ッ、あ、あっ！？」

だけど身体は期待感ではちきれそうなのに、セノ君はまだまだ僕を焦らした。今の僕なら、きっとセノ君の乳首責めで簡単にイケる。本気で責められたら、胸だけで何度も達することができると思う。でも彼はそれが分かっているから、あえて全力を出さない。

ちゅ、ちゅ、と軽く吸い付いては、たまに小刻みに舌を使って乳首を舐めて、僕が腰を浮かせたら止める。そこで悶えた僕が彼を見つめたら、楽しそうに笑って、すりすり両手で乳首を擦る。イケなくて苦しむ僕が首を振ったら、次は両手をそのままに、毒の言葉を耳に落として楽しむ。

「あ〜あ。イキたかったのに残念っすね？」

「はあ、はあ、はあっ...！ん、ううう...！な、んでっ、今、わざと」

「わざとじゃないっすよ。次は指でしようかなって思っただけ」

「指も、好きだからっ...！そんなっ、優しくなくてもいいからあ...！」

「なんで？こうやってクリクリされんのも好きでしょ？今のうちにじっくり高められた乳首、後でいっぱい吸われて、やだやだしてもイカされたいでしょ？」

「ッ、や、あ、あゝ、今イキたい、もおイキたいいいゝ...っっ！」

「まあそうっすよねえ。こことかもパンパンだし」

「んひうッッ！！？」

そしてセノ君の憎たらしいところは、ソフトに触っていたとしても、しっかり快感を生む触り方をしてくるところだ。焦らすといっても、下手な人なら僕のテンションも下がって、それで気持ちも鎮火していくことだってある。でもセノ君は、絶対に気持ちが下がる触り方をしない。もっと刺激が欲しい、それじゃあ足

りないと思う絶妙なところを責めてくる。あまり弄り過ぎたら達してしまうと思うなら、今度は言葉で上手く昂らせてくる。そして僕がギリギリを歩いているのをしっかり観察したうえで、次なる一手を打ってくるんだからひどい。

かくかくと揺れる腰の部分に、セノ君の片手が伸びた。そして膨れ上がった股間を、ゆっくりと下から上に撫でられる。薬指と中指が、下着の中で爆発しそうな熱を撫でる力加減が本当に上手くて、暴れる膝の力で椅子がきしむ音がした。

「はく、う、ううんゝっ！んあ、あ、それ、それえ...ッ！はふっ、う、う、も、っと、強くっ...！！」

「ええ〜？でもメロさん、せっかくならもっと気持ちよくイキたくない？」

「あ...！？」

もどかしさで、ぎりりと奥歯を噛みしめた。イキたい、イケそうだ、早く早く、身体の奥から急き立てられている。だから僕の顔の横にあったセノ君の顔が、下に下にと移動して、下着の前で止まったときには。期待感が高まり過ぎて、つい腰を前にずらしていた。

彼の口が、僕の股間の前にある。そうか、待ちに待った瞬間はフェラで与えられるのかと勝手に想像したところで、セノ君の口がチャックの金具を噛んだ。そのまま金具が下ろされて、ジッパーの部分が少しずつ解放されていくと、僕の欲求も一緒に外へと出ていくようだった。

ああ、ようやく直接触れてもらえる。ちょっとでも舐めてもらえたら、今度こそイケるはずだ。よかった、これでもう焦らされないんだと思ったら、ただじっと彼を見つめて身体を震わせていた。絶頂への期待感で、口が閉じられなくなる。

「うあ...！あ、あ、ッ、っ...！」

ひく、ひく、と大人しく身を硬直させながら、その時を待った。僕の熱が外に飛び出て、先走りで濡れそぼったそれが舐められる瞬間を。頭の中で勝手に情景を思い描いて、舐めしゃぶられて何度も達する架空の僕を想像して、脳内で先にイッていた。

だからこそ、してやられた。半分くらいチャックが下ろされたところで、一息つくように口を離れたセノ君に我慢ならなくなってしまった。何をしているんだ。早く、一刻も早く。溜まった熱を全部解放してくれないと困る。僕は1秒だって待てないのにと気持ちが先走って、ぱっと両手を伸ばしてしまう。

「ッ、やあっ！舐めて、早く舐めっ」

そこまで言ったところで、ゴトンと音がして我に返る。そういえば僕は、手を動かせない制約があったんじゃないかったか。気が付けば僕は、彼の頭を押さえるのに必死で、握っていたはずのものを持っていなかった。当然手を離れたものはどちらも床に転がっていて、それらを目にいれてから顔が青ざめていく。

「あ～あ。何してんのメロさん」

「やっ...！ちがっ、ごめん、今のは違うからっ！」

「電マもロープも落としちゃったっすねえ」

「やめて...！縛らないで、電マもやだっ！」

「事前に言っておいたんで、約束は守ってもらわないと」

「待って！次は落とさないから！だから」

「待たないっす。普通に次とかないんで」

「やだっ、やだやだ、ねえ待って、待ってよ！！」

僕が謝るよりも、言い訳するよりも、セノ君の行動は早かった。話しながらも手を止めない彼は、床に落ちたロープを持って、椅子をきしませて暴れる僕の手を縛っていく。背もたれの後ろに回された手を動かすことで、少しの時間は縛られるのを阻止していたけれど、結局ガチガチに固定されて、ほとんど動かせなくなってしまった。最悪だ、もうこれで足もほどけなくなると嘆いていたら、目の前でセノ君が電マの動作を確認し始めている。

「ッ、せ、セノ君、せめてそれはっ」

「ん？だってメロさん、両方落としちゃったじゃないっすか。どっちかは無しってことにしなかったし、電マも使うっすよ。でも俺も鬼じゃないんで、まずは緩めにしてあげる」

「っく、うゝ...！！？」

しかも、電マに関してはもっと苦しい刺激が僕を襲った。延タイカされると思った僕は、きっと最初から強振動で押し当てられるだろうと予想したのに、実際は逆で、振動は驚くほど緩かった。当てられた場所も、熱に直接当てるかと思いきや、狙われたのはなんとお尻の方。お尻と会陰の上をゆっくり行き来して、たま

にどちらかにとどまる。そのもどかしい刺激に、きつく拘束された身体が背中側にしなった。

「うあ...！！？ああ、や、だ、それ嫌っ、あ、なんでっ、なんで...！」

「なんでって言われても、俺がしたいからっすけど」

「ふ、うう、ん、あ、ああ、あ、〜〜〜ッッッ！！」

ぐうう、と会陰のところに強く押されると、外側からじんわりと前立腺を刺激される心地よさに悶えた。声も出せずに首を振る。気持ちいい。確かに気持ちいいのに、足りない。こんな微弱な振動じゃ物足りない。さっきフェラでイカせてもらえと思った分、心が弱っている。もう耐えたくないのに。いっそ手足を縛ったなら、僕の抵抗力を根こそぎ奪ったなら、有無を言わさずイカせてくれと、危険な思考に陥っていく。

「も、もお、無理いいいゝい...ッ！お願い、イカせて、早くイカせてえっ！！！」

「縛る前はあんなにやだって言ってたのに、イカせて欲しくなっちゃったんすか？メロさんも大概スケベっすね？」

「くあ、あ、あっ！ッん、スケベでもいいっ、変態でいいからっ！！はあ、はっ、く、ううう...！イカせて、イカせてっ、イキたいイキたいイキたい...ッッッ！！」

ぎしぎしと、僕が縛られながらも暴れるせいで椅子が音を立てる。この椅子はプレイ専用に使われた物ではないから、大人が間違っただけで壊れてしまいうるんだけど、いちいち構ってられない。僕は限界なんだ。イキたくて頭も口もおかしくなってるんだ。椅子なんか壊れてしまえと思うくらいには、ギリギリを彷徨っている。

だけど、あまりにも焦らされ過ぎた結果、身体がかなり敏感に仕上がってしまったらしい。さっきまでと同じ振動なはずなのに、がくがくと腰から下が震え始めた。あれ、なんだこれは、ちょっと変じゃないかと思っている間も、振動は止まってくれない。

「んっ、んんっ、あ、え、ッ、ツツ...！！？は、はひう、うう、ンンンっ！！？」

「あれあれ、どうしたんすかメロさん。なんかイキそうな感じでガクガクしてるっすけど」

「あ、っく、わ、かん、なっ、あ、ああ...ッ！？はっ、うゝ、うう、っ、あゝ、あゝっ、ううううんんっ！！！！？」

お腹の中からじんわりとこみ上げてくる絶頂感は、まさしく中イキの時のもの。嘘でしょ、僕、こんな弱い電マの刺激でイっちゃうのと、自分でも困惑してしまう。

でも、普段の僕なら。こんなイキ方をしたら後々苦しくなるから、予後が悪いと経験で分かる。しかも相手がセノ君なら、なおさら我慢すべきだと判断するはずだ。だけど、散々焦らされた今は。少しでも絶頂のチャンスを逃したくないと

思う今だから。どうなったっていい、イケるなら多少おかしくてもいいと、こみ上げてくるものを一切耐えようと思わなかった。

「は、あ、ああああっ！ああんっ、ん、んん〜〜〜っっ！！」

ガクガクと、足が大きく揺れた。びくん、と縛られた身体が跳ねて、椅子が軽く動く。弱い刺激で得られた、甘くて重い絶頂は、ほぼ丸一日焦らされた身体にはあまりにも毒だった。

「ああふ...っ！ん、あ、あああああゝ あゝ あああ...！」

「あ、イっちゃったっすか？でもいいっすよ、いっぱいイッてもらって。変態でもいいからイキたいって言うくらい、イキたくて仕方なかったんっすもんね？」

「はふっ、っぐ、ッ、あ、あううっ！っあゝ、あ、ひ、っう、うあ、ああ、あ、ん、んんんうっ！！」

射精こそしなかったけれど、僕は確かにイッていた。それが望んだベストの絶頂でなくても、一度達した事実が救いになる。形はどうあれイケた幸福感が強い。だからセノ君から煽るようなことを言われても、反応することすら億劫だった。ただし、幸せだけを感じるのは短い時間で終わった。最初の1、2回は、気持ちいい、イケて嬉しいと思うだけにとどまったけれど、間髪入れない3回目の絶頂に至った時から、どうも様子がおかしいことに気が付く。言われてみれば、僕をイカせるために必要な刺激はごく僅かだ。しかも前立腺を強く押されるとか、思い切り熱を扱かれるといった、決定的な刺激も特にない。性感帯を外側から緩く震

わせる。ただそれだけの刺激でイッてしまうことが、どれほど恐ろしい事かを徐々に理解し始める。

それからは、急いで行動に出た。4回目の甘イキに達したとき、これ以上は危険かもしれないと、椅子をきしませて腰を動かす。

「あ、ああっ、ま、って、セノ君っ！これ、も、いいっ...！もうイケたから、もういいからっ！」

「何言ってるすか。まだまだイキたいでしょ？散々我慢したんだし」

「ちがっ、これ、絶対キツくなるから...！っく、ううう、お、おかしいの、身体がっ...！ず、っと、焦らされてたからっ！ッ、ま、って、だめ、今そこに当てないでえええ...ッッ！！」

「ずうっと身体ガクガクしてるっすもんね。前立腺、外から責められて嬉しい？気持ちいい？」

「くう、あ、あああっ！！ああう、うっ、ッあゝ！ひっ、とめ、て、も、こんなイキ方...っ！ああ、やっ、ダメダメダメ、またっ、また...っ！！！！っあ、ああああんんんうううっ！！」

5回目の絶頂は、一番激しく身体が揺れた。しかも重くて、なかなか普通の状態に戻れない。まずい、このままイッて敏感なまま6回目の絶頂に入っていくのは本当によくないと、僕は縛られた足を必死に揺らして、身体も左右にねじれるだけねじって抵抗した。もちろんそれで頑丈に縛られた縄がほどけるわけじゃないけれど、セノ君に僕の気持ちを行動で伝えることはできるはずだ。

「ひい、あ、ああうううっ！！だめっ！もうだめえっ！！やだ、こんなのやだっ！お願い、セノ君が欲しい、から...！入れて、早く入れてえっ！」

「やだ、まだ入れてあげない」

「ッッ！！？なんで...！？セノ君、今日すごく意地悪だよっ！」

「ええ～？でもなあ、俺もメロさんから意地悪されたから、おあいこじゃないっすか？あ～あ、メロさんかわいそ。せっかく欲しいって言ったのに、入れてもらえないなんて残念っすねえ？」

「それ、まだ...っ！？」

ただし僕が懸命におねだりをして、セノ君には響かなかった。いや、どちらかというと、響いたところで入れる気はないと言うべきかもしれない。なぜならセノ君の口ぶりでは、僕に非があるような言い方をしているからだ。

それに、セノ君が言った言葉には覚えがある。おそらく、下着写真を撮ったときのキャッチコピーだ。そしてこの、僕が何を言っても言うことを聞かない時と、全く同じ顔をしているセノ君を見てピンときた。

どうやら彼はまだ、僕が内緒で下着のPR写真の仕事を引き受けたことを根に持っているらしい。確かに写真が発覚した段階で怒ってはいたけれど、あの日は流されてくれたじゃないか。なのに実はまだ、許してくれていなかったというのか。というか今も、怒りを引きずっているとは。

そうか、だからいじめてくるのかと、原因が分かったことで納得はした。でもこの件に関しては、自分から率先して撮りたいと言ったわけではないし、僕は悪くないと思う。

「あれは、仕事だったから！仕方なく、ただけで...っ！別に、僕がやりたくてやったんじゃないから！」

「だとしても、俺に事前に言ってほしかった。内緒にされたの嫌だった」

「だって、君に言ったら、怒るでしょ？」

「へえ～？じゃあメロさん、俺から怒られるって分かってて撮影OK出したんすね。それ、もっとダメじゃないっすか？」

「やうんっ！？」

けれど、嫉妬深いセノ君の怒りは深かった。大人の事情を話したところで、そうですか、なら仕方ないですよと折れてくれるほど優しくない。そして僕に怒りをぶつける場合、エロい方向になるのも本当に困る。

甘イキのし過ぎで更に過敏になったところなのに、ねろりと乳首を舐められた。カリッと甘噛みされたら、それだけでまた軽くイッてしまう。しかもイッた僕を咎めるように睨まれると、まるで僕が悪者のような気分になる。

「うあ、あ、あああっ！っは、はう、だめ、乳首も、今はあ...！」

「このイキまくりなエロい乳首も全部見せてた。エッチな顔して誘ってた」

「んう、ッ、だ、って...！ど、しても、断れなかった、からっ」

「俺は何回お願いしても着てもらえなかったのに。知らないオッサンに言われて、ドスケベな下着何枚も着たんでしょ？しかもあんなポーズまでとって。マジでムカつくんですけど？ちゃんと反省して」

「んあっ！？あ、あゝあああっ！？」

そしてとうとう、彼の怒りは鋭い快感になって僕を襲う。最後まで下着のチャックが下ろされると、ドロドロの中身が露呈した。ずるんと隙間からこぼれ出てきた僕の熱を握ったセノ君は、位置を固定してから、先端に軽く電マを当てた。ようやく訪れた直接的な刺激に、僕の熱は大いに喜んだ。気持ちいいと叫ぶように、ビクンと震える。でもそれは一瞬だ。少し当てられたら、すぐに離れて、また離れたら、チリッと掠めるように当てられる。

「はひっ！ひ、ひう、っあ、ああ、あ、やっ、セノく、んうううっ！？？」

更には時々、絶頂手前まで押し当てられる時もあった。でも、当然イカせてはもらえない。射精への欲求が究極に高まったら、ぱっと電マが離れていく。全身の筋肉が突っ張ってから、虚無感で脱力するところまでセットだ。

「はあ、あ、ああああ...！や、なんで、なんでえ...っ！」

「俺も思ったっすよ？なんで俺が知らない、メロさんのドスケベな写真が出回ってんのって。俺の知らないメロさんのエロい格好、色んな人が見ちゃったじゃんって」

「っく、う、うう、んんん...っ！」

あまりにも中途半端なのが、何よりも苦しかった。イケそうなのにイケない。イケないのに萎えさせてはくれない。地獄の焦らしがまた始まるのかと思うと、僕には耐えられなかった。

丸一日おあずけされて、こっちは狂いそうなんだ。だから、セノ君の言い分にまだ納得してはいないけれど、形だけでも謝らなければと、僕は涙ながらに謝罪する。

「ごめっ、なさっ...！セノ君に内緒にしてたの、謝るから...！」

「でも今は謝っても、あの日は謝らなかったじゃないすか。俺にこういうことされてるから謝ってるだけっすよね。それ、結局悪いって思っていないってことじゃないっすか？しかも俺に黙ってオナってたし。このスケベな孔、自分で弄って楽しんでたんでしょ？」

「あああうっ...！」

厳しく自分の過去を非難されていようとも、身体は空気を読まずに彼から与えられる刺激を喜ぶ。だから後ろに入ってきた指を、きゅううと締め付けて中へと誘っていた。ああ、早く、早くそれで熟れ切った前立腺を引っかいてくれと、この場にそぐわない欲求がこみ上げる。

けれど、セノ君は僕の望みを叶えてはくれない。入れてくれた指は、ぴたりと動きを止めた。曲がりもしなければ、抜き差しすることもない。微動だにしない彼の中指に、僕は途方にくれた。どうして。どうして動かしてくれないんだ。そう思ってセノ君を見た。でも見つめた先のセノ君は、いまだかつて見たことがないくらい冷たい目で僕を睨んでいる。彼が本気で怒っているのを感じると、ただひたすら悲しくて、はらはらと涙がこぼれてくる。

「ごめんなさい...！ホントに、ごめんって思ってるから...！そんなに怒らないでよ...」

「どうっすかね～。口では何とでも言えるからな～」

「ほんとだってばあ...！」

仕事も受けてしまったし、写真も世に出回っているし、これら全てが事後報告になったのも、今さら変えられない過去だ。だから僕に唯一できるのは謝罪だけ。ひたすら謝り倒すことで、彼に誠意を見せる以外にやりようがない。

とはいっても、この雰囲気だとただ謝っても効果は薄そう。ここで僕は、彼と付き合っただけのスキルを発揮する。

セノ君は元々僕がゲイビ男優なことを知っているからこそ、他の男優にはしていない、セノ君だけにしてあげる特別な行為に弱い。できればそれを、言葉にして伝えたと更に良い。

「エッチな下着を仕事で着ても、好きな時に脱がせていいのは、セノ君だけだよ...？他の誰にも、させないよ...？」

そして案の定、特別感を出したことを尝试してみると、彼の眉毛がぴくりと動く。ちょっとだけ、そわそわした気配も感じる。なるほど、これは大変効果的だったらしい。彼の機嫌が通常より少し悪いくらいまで回復するにはもう一声だと、セノ君の指を締めながらダメ押しする。

「あの日は仕事で着てたけど…。今日は、君に脱がせてほしくて着てるんだよ？」

動かない指を、きゅむ、きゅむ、と食いしめる。それから、ほんの少し腰を動かす。そうすると指が中に擦れて僕も気持ちいいし、視覚的にもエロくなるはずだ。

さて、反応はどうだろう。言うだけ言ってみたけれど、これでダメなら別の方向からアプローチするしかない。そう思ってセノ君の様子を見ていたら、彼は大きなため息をついた。

「はぁ～～～……」

「…？セノ君？ど、どうしたの？」

「どうしたのとか、よく言えるっすよね？絶対今のも狙って言ったんじゃない。ずっるいんだもんなあ、メロさんって。そうやって煽れば、俺がホイホイ乗ってくると思ってんでしょ」

「っ、そ、そんなことは」

「ううん。思ってる。はぁもう、マジイライラするっす。特にチンコが」

「ッ、あううう`う`ううううっ！！？」

けれど雰囲気は多少柔和になったけれど、口調はまだ苛立ちの残るセノ君が、いきなり電マを亀頭に押し当ててきた。急に強くなった刺激に、身体がビクンと跳ね上がる。更に不動を貫いていた中の指も、あっという間に前立腺を探し出して擦り始めたから、僕は驚きと快感で言葉を失った。

「ッ！！??っ！！？」

「てか何？中もこんなきゅんきゅんさせてさあ。朝からエロい顔で仕事行ったのもムカつくし。見る人全員メロさんのこと犯したくなったらどうするんすか？歩く公然わいせつ罪で俺が捕まえてやろうかと思ったんすけど？」

「ひぐっ、う、うううんんんッ！！??」

電マの刺激で、まずは一度射精していた。それから、敏感になった中の最も敏感な場所を擦られて1回イッて、この一瞬で計2回の絶頂を迎えてしまう。そして多すぎる快感を受け止めきれないまま、次々に与えられる絶え間ない刺激に、僕は目を白黒させた。

あと、文句を言う余裕がないので心にとどめておくが、僕がふしだらな顔つきになったのは、昨夜と今朝にねちっこく焦らしたセノ君のせいじゃないだろうか。まわりまわって自業自得なのではと思う。下着の写真に関しては怒られるのも分かるけれど、今朝の件は僕に罪はないはず。そう思って絶頂に揺れる首を振ったら、なんと電マの振動が上がった。ひどい仕打ちに、ぐんと喉がのけ反る。

「かふ...ッ！！っ、あ、や、いやあああ`あああっ！！」

「俺、簡単には許すつもりないんで。メロさんがこのまま10回イクまで許さないっす」

「っ！！?む、りい...ッ！！そんなに、イケな.....っ！」

「中イキも合わせたら余裕っすよ。さっきはあんなに甘イキしまくってたじゃないっすか。ほら、今度は乳首でもイッたらいいんすよ」

「んあうっ！！？やっ、だめだめだめ、そんな一気に、ッ、ん、ん` ~~~
~っっ！！」

けれどもどうしても僕を許さないつもののセノ君は、ここにきて畳み掛けるように刺激を与えてきた。やる気が欠片もなかったはずの指は、いまや活き活きと動いて、なんなら本数も増えて、僕の中で暴れている。にゅりにゅりと、膨らんだしこりを2本の指が前後に揉みこむのが気持ちよすぎて、パシン、パシンと前立腺から弾けるような快感が全身に広がっていく。

そして、さっきまではイクほどの舌技を使われなかった乳首にも、全力を投下された。ねろねろと舐めまわされては吸われると、もう我慢できなくて、胸を反らしながらイッてしまう。イッている最中でも甘噛みされて先端を舐められると、本当に頭が真っ白になって、ガクガクと腰から下が揺れて制御できなくなった。

「ふあああああああッ！！ああああダメダメダメええええっ！イクッ、ッ、イッ、あ、あう、や、ああああ！？そこはダメっ！今イッてるのにいいいッ！！」

「イッてるから当ててんの」

「ぎい...ッッッ！！っく、あ、あ、ううううううん`ん`ん`っっっ！！！」

しかも振動が強くなった電マを、ぐりぐりと亀頭に押し当てられるのはたまらなかった。気持ちいいけれど、限度がある。いらない、今これ以上の刺激はいらないと、千切れるほど首を振った。それでも止まらない刺激に、肘置きが壊れそうなくらい足が揺れる。

「いやああああああっ！！も、イッた、いっぱいイッたからっ！！許してっ、もお許してえええっ！！！」

「いっぱいって何回？数教えてくれないと分かんないっすけど」

「そ、な、の、分かんない...ッッ！いう、うううんッッ！！」

「ん～、俺も分かんないんで、今のが1回目ってことにするっすね。はい、じゃああと9回」

「ッッッ！！！？？あゝ、う、うそっ、絶対、ちが、あ、ううんッ！！っひ、も、もっと、もっと、イッ...！」

「じゃあちゃんとイク時はイクって言ってほしいっす。それで1カウントにするんで」

「っく、ああああああっ！！？ひう、あ、ああ、やえ、で、今、今そこ舐めちゃ、あう、んん～～～～～っっっ！！！」

でも今日はとことん意地悪なセノ君は、僕が散々イッたのをあえて無視して、適当なところから1回目を数えだした。絶対違う、もっと先に何度もイッていると口答えしたら、電マを当てられてイキまくっていた自身を舐められてしまう。まずい、セノ君のフェラは極上だから、普段でもすぐにイカされるのにと、襲い来る快感に耐えるべく息を飲む。だけれど本当に気持ちいい舌づかいに、僕の身体は見る見るうちに溶かされていく。

「ああ、あ、う、うゝ ～～～っ！っは、ああ、イッ、く、イク、出ちゃ、あ、あゝ
ああああっ！はあ、はあ、はうッ！？え、な、なんでっ、なんで舐める
のっ！も、いい、口離してよおおっ！！」

「まら2回目らからむり」

「～～～ッッ！！くふ、ッ、あ、あああああ...！！イッ、く、うう、イクイク
イク...っ！も、だめ、全部、イッ、あ、ッんんんんううう！！」

射精直後で精液が滲む亀頭を吸われて、それから舌を擦りつけるように舐め上げられて、またしても奥まで飲み込まれる。喉奥に先が擦れて、口の中をすぼめられると、外に出て来いと促された精液が無理矢理搾り取られるみたいだ。我慢できずにイッては、イッている間も前立腺を刺激されて、今度は中イキを強制される。

ただし、僕が口で言う「イッた」という報告が、どれに対してのものかを示すことはできない。だから結局、セノ君が恣意的に決めた1回分のカウントにしかなく、僕は約束の10回に到達するまで、中イキも含めると相当数イカされたと思う。

「9回、ほらラストラスト。ラストは中イキね」

「あううううううう...ッッ！！！！っひぐ、っく、あゝ、ああ、イッ、ぎ、ます、中でえ...っ！！」

「セノ君の指でイッちゃうって言って」

「っ、イク、イッ、く、セノ君の指で、イッちゃううう...！！！！」

そして、縛られた椅子と一緒に大きく揺れながら最後の10回目を迎えて、僕はようやく解放されると天を見上げた。これってラストなのかな、それより前に絶対10回以上イッたはずのになと、考えても無駄な不満が胸にモヤを作るけれど、とにかくこれで約束は果たした。

死ぬかと思った。久しぶりに過酷に責められたと、肩で息をする。でもセノ君ときたら、こういう時に限って自分勝手な男だから、なぜか指を抜かずに前立腺を揉んでくるので、さすがに口答えもしたくなった。

「っ！？な、んでっ...！？もう、10回イッた！」

「うん。それはそう。でも俺わがままだから、そういうの守れないんで」

「やだ、10回で許すって、言っ、あ、ん、っんんんう...ッッ！」

「もっと必死に謝ってくれたら許してあげられるかも」

「~~~~ッッッ！！」

立場的には、僕が悪い体ではある。内緒で受けた仕事の腹いせだと言われたら、至少くらは罪悪感がわくから受け入れる。けれど、全部の仕打ちを許すわけじゃない。僕だって、セノ君の言い分に腹が立つことだってある。自分に都合のいいことばかり言ってと、涙ながらに睨んでしまう。そういう態度が更に彼の心に火を付けると分かっているのに、怒りをぶつけずにはいられなかった。

ただし、そうはいっても不利なのは僕だ。おそらく普通に争っても負けるのに、縛られて動けないんだから分が悪過ぎる。だから抗うだけ負荷が増えると理解しているつもりが、冷静さを失うとボロが出てしまう。

「あ〜、はいはい、そういう感じっすか？まあ反省してないなら、メロさんが分かるまで徹底的になって決めてるんで。そのためにガチガチに縛ったんで」

「ッ！？やだ、それはもういいでしょ！？もう十分っ」

「まだ足りない」

「だめっ！そこはほんとに...っっ！！」

反抗的な僕の態度に、セノ君からの責め苦は一層激しくなった。後ろから指が抜けたかわりに、今度はその手が僕の自身を握って支え始める。そして反対の手は、震える電マを握りしめて、ある場所に狙いを定めていた。

ああ、それはまずい。今の状態の僕にそれは絶対に良くないと首を振った。でも僕が嫌がっても止めてくれないセノ君は、問答無用で熱の先端に電マを押し当ててくる。

「んやあああああああああっっっ！！！！あああああやだやだやだあああっっ！！！！んあ、ああッ、出ちゃうっ！潮吹いちゃうからああっ！！」

「知ってるっす。知ってて当ててる」

「や、だ、こんなとこで...ッ！んんッ！！んんんううんんっっ！！」

イッた後に亀頭責めをされたら、僕は大概潮を吹いてしまう。もう反射条件のように出てくるそれは、癖がついているから自力で止めるのはかなり難しい。強いと言うなら刺激を与えなければ吹くことはないので、セノ君が電マを離してくれたら済む話だけれど、きっと止めてくれないだろう。

でも、僕にだってちゃんと羞恥心はある。こんな、いつもはご飯を食べるダイニングで吹くなんて。嫌だ、ここで粗相をしようものなら、今後ご飯を食べる度に思い出してしまうじゃないか。止めてほしい、生活空間では清らかな記憶だけ残させてほしい。いやらしい思い出で上塗りしたくないと、今日一番の抵抗を見せて拒む。

「いやぁあゝ あゝ あゝ あっっ！！止めてっ！！ここで吹きたくないゝ いいいいっっ！！」

「このくらいのことしないと、メロさん反省しないっすもん。また平気で仕事受けてきそうな予感するし」

「っ...！」

「ちょっと？何すかその沈黙。チンコ壊されたいの？」

「ひぎうううゝ うううっ！！？」

ぐっと強めに押し当てられた電マを、グリグリと回されて目の前が弾ける。同時に、びゅっと自分の股間から透明な液体が吹き上がるのが見えた。それから水っぽい振動音が部屋に響き始めて、恥ずかしいのと惨めなので、ボロボロ涙がこぼれてくる。

「いや、やぁぁぁぁぁあっっ！！出ちゃうっ、出ちゃうからぁあっ！！」

「ね〜。ダイニングの床びちゃびちゃっすよ。椅子も」

「は、うううっ！ッぐ、ッ、あ、ゆ、許してっ、もうやだ、やぁぁぁあっ！！」

「そういう本気の謝罪、あの時に聞きたかったな〜」

「〜〜っあああああ！！や、ごめ、なさっ、んんっ、んゝんん
んッッ！！っひ、だめ、だめ、もうやめて、願っ、あ、〜〜ッッッ！！」

びしゃ、ぶしゃっと、定期的に吹いてはセノ君の手や身体、そして自分を含めて
周囲を濡らしてしまう。フローリングの床を水浸しにして、その上に更に新しい
潮をかけた。量は減ってもどんどん出てくる液体は、僕の中に溜まった潮がなく
なるまで、刺激を与えられる限り出続ける。

「も、無理、無理です...ッ！こ、れ、以上は、あ、あゝうっ...！」

「無理なのに吹いてるっすけど。上の口は素直じゃなくて困るね〜？」

「んぎ、いいゝい〜〜っ！！」

無理と言っても、許してと言っても、反省の姿勢をこれでもかと思わせても、全く
電マは止まってくれなかった。それから本当に出なくなるまで追い込まれて、出
すものが無くなっても扱かれたり、会陰を刺激されたりして、言葉通り徹底的に
責められた。

ー続きは本編にてお楽しみくださいー